
● 地域の誇りを高め、ホスピタリティを向上させる

- 飛鳥宮跡活用の取組が、地域の住民の暮らしを快適にするとともに、誇りをもって参画してもらえるものとなるよう努める。
- 国、県、村、地域住民(団体)、周辺寺社、研究者、民間事業者等が協力して、飛鳥宮跡活用の取組を推進する体制づくりを行い、地域全体でホスピタリティの向上に取り組む。

● 進化する活用を目指す

- 将来的な発掘調査・研究の進展や公有化の進展、史跡指定範囲の拡張等に合わせ、提供するさまざまなコンテンツも適切に進化させる。
- 遺構表示についても、暫定的・仮設的なものから建物の復元まで、その場にふさわしい手法を適切に選択することで、柔軟に進化する活用を目指す。
- 各種の活用の取組については、学術的な検証に基づくとともに、参加する地域住民や来訪者の評価や意見を聞いて、内容や方法を改良してより良いものとしていく仕組みを工夫する。
- 各種の活用の取組において、公募制やコンペ方式を導入することにより、さまざまなノウハウやアイデアを集めるとともに、研究者や学生、個人、民間事業者など多くの主体が参画できるよう工夫する。
- 資金調達においても、ふるさと納税やクラウドファンディング等を利用し、より多くの人に参画する意識を持ってもらえるよう工夫する。



◆「飛鳥光の回廊」における飛鳥宮跡の活用風景（写真提供：明日香村）

5 飛鳥宮跡の活用に向けて三つの方針を定める

飛鳥宮跡の活用に向けて、「遺構保存」、「歴史的風土・景観保全」、「活用」の三つの方針を定める。

遺構保存の方針

飛鳥宮跡の保存管理については、これまで明日香村により、史跡伝飛鳥板蓋宮跡を対象に「史跡伝飛鳥板蓋宮跡保存管理計画」(明日香村文化財総合管理計画(H26.3改訂))⁵⁾が策定されている。同じく、飛鳥宮跡の確実な保存と有効活用を目的とした「飛鳥宮跡保存活用構想」(H26.3)⁶⁾も策定されている。

今後は、こうした検討内容と本構想を踏まえつつ、より詳細な手順を定めた新たな保存活用計画を策定し、遺構の確実な保存を前提に、適切な活用を展開する。

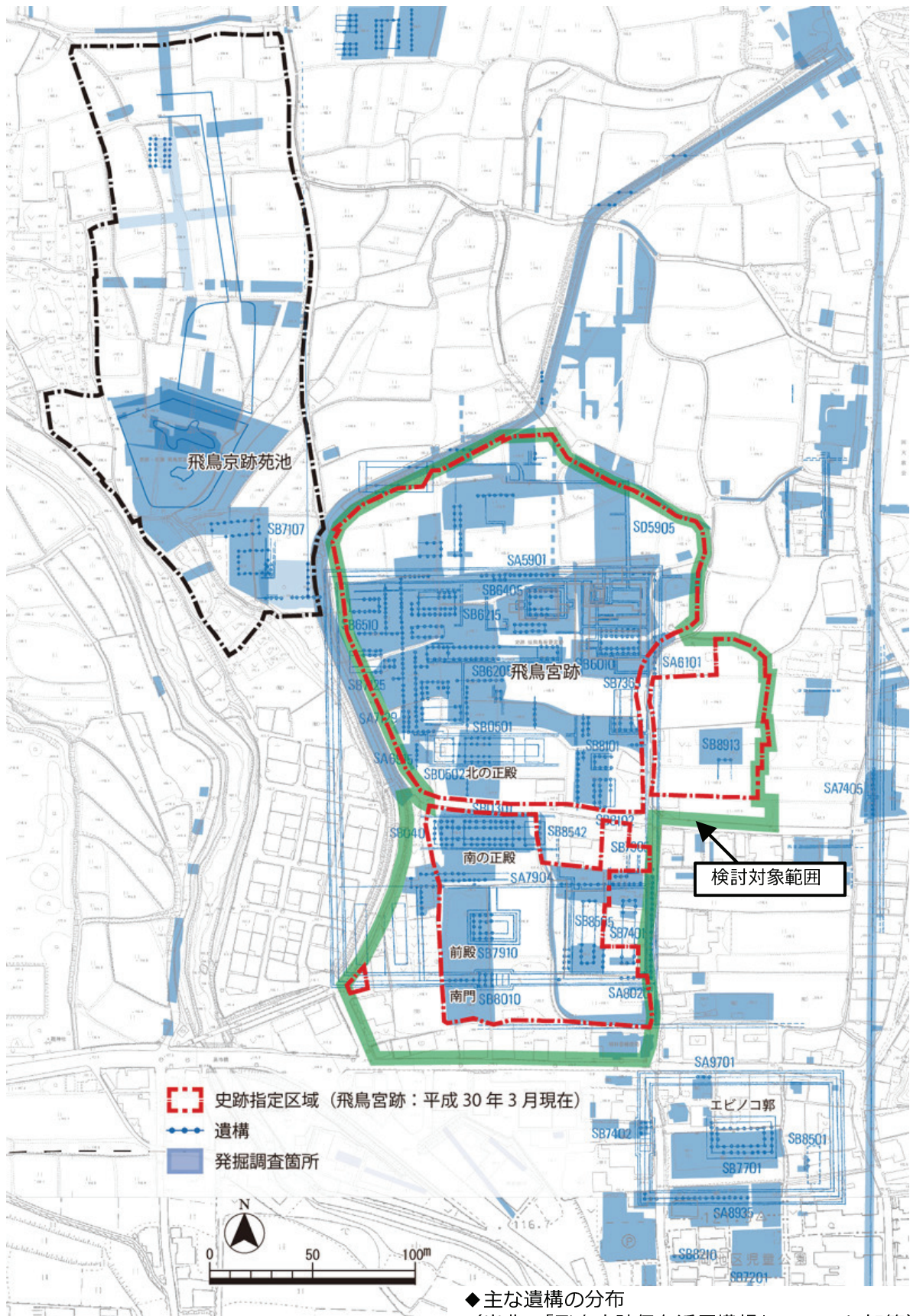
- ① 遺構の保存を確実なものとするため、発掘調査の成果に基づいて、遺構の配置・範囲・覆土厚等の状態を的確に把握し、工法等を工夫することで、活用の取組によって遺構に影響を与えることのないよう配慮する。
- ② 計画的・継続的な発掘調査を行い、遺構の全体像を明らかにして、それらの適切な保存・活用を図る。また、活用の取組の効果発現等を確認して、長期的には、飛鳥浄御原宮の大極殿ともいわれるエビノコ郭等を加えるかなど、見直しも検討する。
- ③ 活用のためのゾーニング区分等については、既に判明している遺構の配置状況等に基づき、明日香村の「飛鳥宮跡保存活用構想」のゾーン・エリア区分⁷⁾を踏まえたものとする。



◆発掘調査の公開（現地説明会）
事例：飛鳥寺西方遺跡



◆発掘調査の公開（現地説明会）
事例：小山田遺跡
(写真提供：榎原考古学研究所)



歴史的風土・景観保全の方針

飛鳥の地において、古代と変わらない山容や、地域の人々の1400年にわたる暮らしの中で創られ、守られてきた田園や集落が織りなす景観は、江戸時代の「大和名所図会」や入江泰吉の写真等としても遺されてきた、大きな「価値」であり「財産」である。

飛鳥宮跡は、明日香村の歴史的風土・景観の枢要な構成要素であり、飛鳥宮跡から周囲を見たときの景観と、甘樫丘など周辺の視点場から飛鳥宮跡を見たときの景観の双方向に配慮する必要がある。

飛鳥宮跡の活用においては、遺構の表示等を行うことにより新たに創られる古代を彷彿とさせる景観と、現存する歴史的風土・景観との連続性が保たれるよう配慮するとともに、飛鳥宮跡活用の取組全体が地域を活性化し、長期的により良い歴史的風土・景観の形成を促進するものとなるよう努める。

- ① 遺構の表示等を行う場合には、飛鳥宮跡の北側に展開する景観の広がりや、周囲の山並みの連続性を妨げないよう留意するとともに、植栽等による遮蔽や修景により、周辺景観等と調和のとれた新たな景観形成を目指す。
- ② 案内サインなどの工作物等を新たに設ける場合には、「明日香村景観計画」や「明日香村公共事業景観形成指針」に準拠するとともに、事前に景観に及ぼす影響を検証するなど、歴史的風土・景観の保全に配慮した活用の先導的取組となることを目指す。
- ③ 景観を解説するコンテンツの開発や万葉集に詠われた場所や風景の解説など、景観を適切にアピールする活用方策を検討する。
- ④ 隣接する飛鳥京跡苑池を含めた景観の形成を検討する。



◆飛鳥宮跡への眺望（遠景）：祝戸展望台から



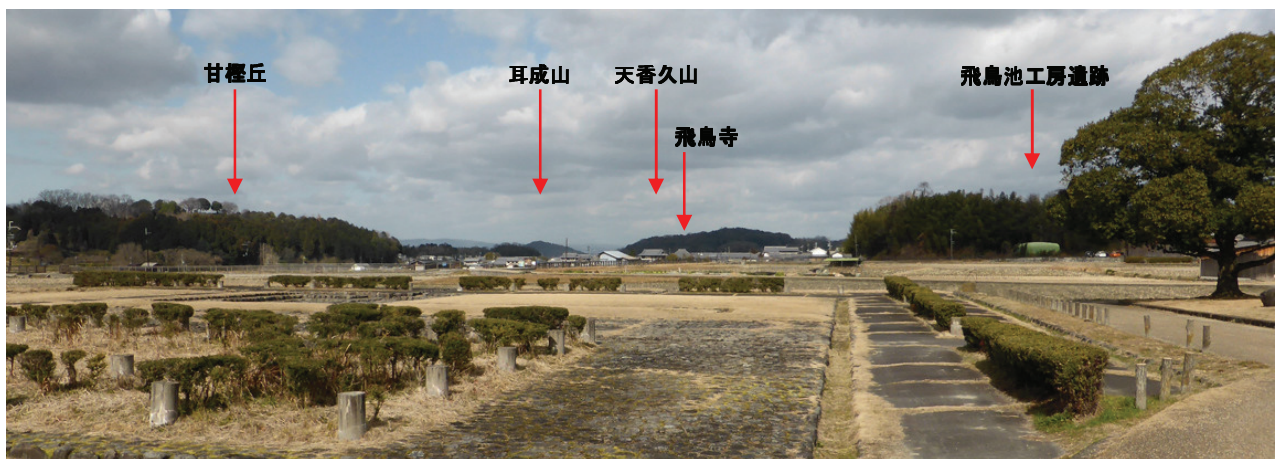
◆飛鳥宮跡への眺望（遠景）：甘樫丘展望台から



◆飛鳥宮跡への眺望（中景）：飛鳥京跡苑池から



◆飛鳥宮跡から酒船石遺跡方向への展望



◆飛鳥宮跡の北側に展開する景観



◆周辺遺跡の整備状況 川原寺跡



◆周辺遺跡の整備状況 飛鳥水落遺跡

活用の方針

飛鳥宮跡の意義・価値を分かりやすく伝え、日本の歴史に親しみ、より深く知る場を創造するため、さまざまな手法による活用を検討する。

活用の方針については、「さまざまな活用方策を展開する」、「遺構を表示する」、「地域が連携・協力する」の三つに分類して示すとともに、それぞれに即した展開例を第2部以降に示す。

● さまざまな活用方策を展開する

- ① 考古学・歴史学をはじめとするさまざまな分野の最新の研究成果と活用の取組を相互作用させる
- ② 飛鳥宮跡の意義・価値を広く世界に発信する
- ③ 祝祭でにぎわう
- ④ 住民や来訪者が快適に過ごせる空間をつくる
- ⑤ 飛鳥宮跡をわかりやすく伝えるための拠点としてガイダンス施設を設ける

※ 情報の受け手となる来訪者の区分として、東アジア諸国等との交流の歴史なども勘案し、「海外からの来訪者(韓国・中国、欧米諸国等)」、「子ども・若者(学校利用者)」「国内旅行者」を想定し、この区分を念頭に、さまざまな活用方策の展開を検討する。



◆発掘調査の公開
事例：長岡宮跡



◆公園としての活用
事例：さきたま古墳公園

● 遺構を表示する

- ① 往時の空間を体感できるように遺構表示等を整える
- ② 往時の建物を復元する



◆ 模型による展示
事例：斎宮跡



◆ 復元建物の展示
事例：平城宮跡

● 地域が連携・協力する

- ① 周辺の歴史文化資源等とのネットワークにより、情報発信力を高める
- ② 地域が連携・協力してホスピタリティの向上を目指す



◆ 地域イベント
事例：古都飛鳥文化祭（写真提供：明日香村）

第2部

6 活用の展開例

さまざまな活用方策を展開する

① 考古学・歴史学をはじめとするさまざまな分野の最新の研究成果と活用の取組を相互作用させる

- 新たな知見を得るため、発掘調査等に積極的に取組み、その成果を広く発信する。
- 隣接する飛鳥京跡苑池を含め、発掘調査時の現地説明会、見学会・体験会等を実施し、本物の遺構や出土品を直接見る機会として「遺跡ツーリズム」を展開する。
- 地下に存在する遺構の様子や意味を来訪者に分かりやすく伝えるため、発掘時の画像やイラスト等を活用して解説する仕組みを検討する。また、一つの学説だけでなく、異なる説や論点等も紹介することにより、飛鳥に対する興味・注目を喚起し、若い世代や外国人にも歴史の面白さを学んでもらえる仕組みづくりを行う。
- 考古学・歴史学をはじめとするさまざまな分野の最新の研究成果が活用の取組を充実させる一方、活用の取組に研究者や学生が参画することで研究活動が活発化するような相互作用の仕組みを構築し、研究機能の強化・向上を図る。



◆現地説明会 事例：飛鳥京跡第153次調査
(写真提供：橿原考古学研究所)



◆現地説明会（遺物の公開） 事例：平城宮東院地区



◆発掘体験教室
事例：斎宮跡



◆地下の遺構（写真）を表示した解説サイン
事例：国営飛鳥歴史公園キトラ地区

② 飛鳥宮跡の意義・価値を広く世界に発信する

○ ASUKA を広く世界に発信する

- 7世紀に東アジアの国々から新しい制度や文化を受容し、新しい「日本」を創成する中心となった飛鳥宮跡の歴史性、国際性について、広く国内外の人々に知ってもらえるような活用方を検討する。

○ 情報発信のための多種多様なコンテンツをつくる

- 来訪者の歴史に対する興味に応じて、基礎的な知識から専門的・先端的な研究まで幅広い情報を、多言語やバリアフリーな方法で発信する。
- 日本史の深い知識を持ち合わせない海外からの来訪者や子ども・若者などに向けては、娯楽性、ゲーム性の高い楽しめるコンテンツを用意し、また、知的好奇心旺盛な国内の旅行者などに向けては、その要求に応えられる内容のものを用意する。
- 来訪者の属性を勘案した上で、例えば、小説やコミックス、映画やドラマ、ゲーム、VR(仮想現実)・AR(拡張現実)など多様なコンテンツの制作を検討する。
- 「明日香における歴史展示」⁸⁾や「飛鳥女史紀行」⁹⁾等に基づき、人物を中心に据えた歴史ストーリーをつくることで、わかりやすく歴史を解説する。



◆飛鳥浄御原宮正殿のCG画像
出典：明日香村「バーチャル飛鳥京」アプリ



◆VR画像を使った案内

○ 現地での解説・案内のため、情報通信技術を活用する

- 最新の情報通信技術を用いた解説・案内は、導入のためのガイドランスとして、主に海外からの来訪者や子ども・若者などを対象として想定する。
- フリーWi-Fiを整備するとともに、デジタルサイネージ、スマートフォン等情報更新の容易な端末を活用して、多言語で新鮮な情報を提供する。また、適宜アップデートを行い、常に先進的なコンテンツとする。
- 提供するコンテンツとしては、飛鳥宮や周辺の寺社、陵墓、遺跡などの歴史文化資源の解説や案内、地下遺構の(発掘時の)状況、万葉古歌や記紀の紹介、およびそれらの解説等のほか、その場所でしかできないゲームや、歴史の問題を解きながら周遊するアプリ等の開発を行う。
- VR・AR等の先端技術を活用して、往時の飛鳥宮の風景や人々の営みを再現し、遺構表示と映像を組み合わせることにより、臨場感の高い飛鳥時代の空間を創造する。

③ 祝祭でにぎわう

- 考古学や歴史学をはじめとするさまざまな分野の最新の研究成果を踏まえ、往時の儀式や祭祀、古代衣装、古代食などを再現するほか、伎楽、歌垣、蹴鞠などの行催事等も再現して、お祭りに仕立てる。また、それらが更なる研究の進展や伝統技術の継承、地域の活性化につながるよう工夫する。
- 「飛鳥」あるいは「ASUKA」をテーマとする音楽や演劇等による祝祭を開催し、にぎわいを演出する。
- 住民が楽しめるのは勿論、来訪者でも気軽に参加できるプログラムを組込むことで、祝祭や行催事に多くの主体が参画し、多様な交流が深められるよう工夫する。
- 祝祭や行催事の開催にうまく活用できるような仮設的な遺構表示を検討する。

<取組のイメージ> (仮)「あすかのみや」再生プロジェクト案

- 飛鳥宮跡におけるシンボリックな取組として、住民や来訪者によるボランティアを主体としたプロジェクトチームによって、飛鳥の宮を造営する過程をお祭りに仕立てて再現する。それにより、往時の生活や技術をより深く体感・体験できるきっかけとする
- 建物の設計をはじめ、使用する素材、デザインやディテール、加工技術などの分野ごとに公募制やコンペ方式を導入することにより、さまざまなノウハウやアイデアを集めるとともに、研究者や学生、個人、民間事業者など多くの主体が参画できるよう工夫し、多様な参加者の協働作業とすることで、宮跡の活用、地域の活性化を目指す。
- このプロジェクトにより、主催者と参加者の交流を深めるとともに、伝統技術の継承、経済の活性化等に資する。
- プロジェクトの展開
 - ◇ 地域の農林・土木などの「産」や考古学・建築学などの「学」の支援のもとに、多様な関係者による協働作業として運営する。
 - ◇ 定期的・継続的にボランティアを募り、参加者を増やすことで体験を通じて得た知識や技術を継承する。
 - ◇ ふるさと納税やクラウドファンディング等を利用し、より多くの人に参画する意識をもってもらう。
 - ◇ 公募やコンペ方式で生まれた作品(建物等)を、遺構表示の一部として活用する。

